

マタイによる福音書24章 「世の終わり」

1A 知らされる徴 1-35

1B 神殿破壊 1-3

2B 世の終わりの徴 4-31

1C 産みの苦しみ 4-14

1D 惑わし 4-8

2D 苦しみの中の宣教 9-14

2C 大患難 15-22

1D 荒らす忌まわしい者 15-22

2D 偽預言者の惑わし 23-28

3C 天変地異 29-31

3B 到来の接近 32-35

2A 知らされない日時 36-51

1B ノアの日(目を覚ます) 36-42

2B 盗人(思いがけない時) 43-44

3B 忠実な僕(忠実さ) 45-51

本文

マタイによる福音書 24 章を開いてください。私たちはついに、マタイによる福音書の五つ目のイエス様の教えの部分に入ります。週報の裏に書いていますが、マタイ伝には大まかに五つの長い説教があります。天の御国の宣言をした山上の垂訓、次に宣教について教えられた 10 章、そして天の御国の奥義の譬えが 13 章にありました。それから教会の中で起こり得る人間関係、つまりきという話題を取り上げている 18 章があります。そして 24 章と 25 章です。

1A 知らされる徴 1-35

1B 神殿破壊 1-3

1 イエスが宮を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに向かって宮の建物を指し示した。2 すると、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはこれらの物すべてを見ているのですか。まことに、あなたがたに言います。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」

私たちは、23 章で、イエス様がユダヤ人指導者たちに対して裁きを宣言したところを見ました。「23:38 見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。」と言われました。主の栄光が留まっているはずの神の宮が荒れ果てると言われたのです。しかし、それは彼らが見捨てられたのではなく、彼ら自身が主に立ち返る時に救いが与えられることも、イエス様は仄めかしておられま

した。「23:39 今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」彼らがいつか、イエスご自身をメシアとして受け入れ、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と告白する時が来ます。それまでの間、宮が荒れ果てたままになってしまいます。そこで今読んだ、1-2 節の話が始まります。4 節から始まるのは、「ユダヤ人が神の選びの民として生きている『この時代』」が、神殿破壊後にどのように展開していくのかを表しています。神殿が破壊されて、それからこの時代、あるいはこの民族が神に立ち返るまでに、一体どうなるのか？をイエス様が説明していかれるのです。

23 章において八つの災いを宣言されて、それから宮を出て行った一行ですが、弟子たちが宮の建物を指し示していました。これはすごい建物で、金でおおわれた大理石によって建てられました。一つの大理石は 2トンから 10トンもします。しかも、その一つ一つにきれいに彫刻が彫られていたのです。そしてこの神殿は、イエスが生きておられたころは、紀元前 20 年にヘロデ王によって拡張工事が始まり、すでに建築年数が 46 年もかかっており、まだ完成していませんでした。紀元 64 年によく完成したのです。ですから、神殿の光景は、文字通り目を見張るものでした。

しかしイエスは、その石がくずされて、積まれたまま残ることはないと言われました。神殿が完成した 6 年後、つまり紀元 70 年に、ローマ軍がエルサレムの町を破壊しました。将軍ティユスは神殿を破壊しないように言いつけていたのですが、一人の兵士がたいまつを投げ込み、内部が焼失しました。金箔の金が液体になって、石と石の間に入りました。それが固体になったので、ローマ軍はその金を取り出すために、その石を一つ一つ取り壊していったのです。イエス様の言葉通りになりました。

3 イエスがオリーブ山で座っておられると、弟子たちがひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか。あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。」

場所はオリーブ山に移っています。最後の週は、ベタニア辺りからエルサレムに行き来していましたから、オリーブ山のいるのはごく普通です。私的な会合の場にしていたゲッセマネの園もオリーブ山の麓にあります。そこで、弟子たちが他の人たちに聞こえないようにしたので、神殿破壊のことなど、人に聞かれたらまずいものです。それで、秘かに尋ねています。

「いつ、そのようなことが起こるのですか。」とまず、尋ねています。けれどもその後で、「あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。」と尋ねています。神殿が破壊されることが、なぜ主が戻って来られて、世が終わる時の徴と結びつくのでしょうか？これはおそらく、彼らはゼカリヤ書 14 章を考えていたのかもしれませんが。「14:1-3 見よ、【主】の日が来る。あなたから奪われた戦利品が、あなたのただ中で分配される。「わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て

行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」「【主】が出て行かれる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。」主が来られるのですが、その前に世界の国々が軍隊で攻めて来て、エルサレムの都も取られてしまう、けれども主が来られて軍隊を滅ぼされるという預言です。そして、その後で人間の国は転覆され、神の国をキリストが立ててくださるという内容になっています。ですから、彼らにとって神殿が破壊されるという出来事というのが、世の終わりと主の到来が直結していたのです。

2B 世の終わりの徴 4-31

1C 産みの苦しみ 4-14

1D 惑わし 4-8

4 そこでイエスは彼らに答えられた。「人に惑わされないように気をつけなさい。5 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わします。6 また、戦争や戦争のうわさを聞くこととなりますが、気をつけて、うろたえないようにしなさい。そういうことは必ず起こりますが、まだ終わりではありません。

イエス様は、終わりの日について語られる時に、初めに終わりの日ではない徴について語られました。しばしば、「これで世の終わりだ」と言われる事柄について、そうではないことを注意しておられます。「人に惑わされないように気をつけなさい。」と言われます。一つは、イエスの名を名乗る者たちの姿です。ユダヤ人の間で、歴史的にしばしば偽メシアが起こりました。紀元二世紀には、第二次ユダヤ人反乱「バル・コクバの反乱」がありました。彼をメシアとしてラビが担ぎ上げたのです。その後も時々、偽メシアが現れ 20 世紀にはシュネルソンというラビが出てきて、今でも彼がメシアであり、その復活を願って祈っている人々がいるほどです。そして私たちはもちろん、日本で、そしてお隣の国で、メシアを自称する人たちが現れましたね。

そして、「戦争や戦争のうわさ」です。キリストの時代以来、世界では平和な一年に付き、13 年に割合で戦争が起こっていたと言われていています。ですから、こういった戦争が起こる度に、「世の終わりであるかもしれない」と言う人々が現れても、惑わされないようにということです。

7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで飢饉と地震が起こります。8 しかし、これらはすべて産みの苦しみの始まりなのです。

ここの「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり」という言い回しは、小さな規模の争いが、全面的な戦争に発展している姿として、聖書では使われています(2歴代誌 15:1-7、イザヤ 19:1-4)。私たちは近代史で、この一連の出来事を見ています。二つの世界大戦です。欧米列強が始まり、その中の民族的ないざこざで、あらゆる国々が巻き込まれてそれで全面戦争になったのが、その経緯です。そして、「あちこちで飢饉と地震」とありますが、これだけ物資が豊かになった時代ですが、それでも飢饉が大量に出て来ました。それらは天災というよりも、国々の独裁的な指導者

による誤った経済政策によって、人災として起こった場合が多いです。そして、地震です。人類の歴史で記録されている大規模な地震を全て合わせても、20 世紀、21 世紀に起こった地震の数は、はるかにしのぎます。

しかし、これらは「産みの苦しみの始まり」だとイエス様は言われます。これらのことは、苦しみのほんの始まりに過ぎないということです。けれども、「産みの痛み」です。出産の直前には、母親は陣痛と呼ばれる痛みを経験します。陣痛の間隔は、出産が近づくにつれて小さくなり、出産の時は非常に大きな苦痛をとまいません。しかし、そうした痛みはすべて、赤ちゃんが産まれた喜びによって過ぎ去ってしまうのです。世の終わりも同じであり、初めは間隔をあけて起こっていた出来事が、次第に間隔が縮まり、そしてその規模も大きくなります。主が戻って来られる直前には、大異変が起こります。そして主が戻って、全てを一新させるのです。ですから、産みの痛みとは、希望のある痛みです。子が産まれるためには、通らなければいけない痛みです。

2D. 痛みの中の宣教 9-14

9 そのとき、人々はあなたがたを痛みにあわせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。10 そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。11 また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。12 不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。13 しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。

この箇所は先週、午前礼拝で取り組んだことです。そのメッセージを聞いてください。これは、イエス様が使徒たちに、「あらゆる国の人々を弟子とせよ。(マタイ 28:19)」と言われた命令の中で、起こって来る出来事です。イエス様を証しするその証しのゆえに、世界中で迫害されます。そして、二つの痛みがあります。一つは不法です。世界に不法がはびこり、それゆえ人々は信頼するのを避けたり、憎しみが増えていきます。もう一つは、惑わしです。偽預言者とありますが、これが本当だと言い含めて、それを信じたら裏切られるというものです。この二つが、教会の中にも入り込んで、それで大きく試されます。しかし、全世界に福音が宣べ伝えられてから終わりが来ると、イエス様は言われます。つまり、主が命じられたことは、これらの痛みの中でも必ずその通りになるのだという励ましなのです。

ですから私たちは、「最後まで耐え忍ぶ」ということが必要だということです。主の救いの喜びの中に、しっかりと留まります。このイエス様への愛を、またイエス様から愛されているという確信を、どんなことによっても、誰によっても奪われないのだという強い決心です。

ところで、イエス様が、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり」と言われてから、それから飢饉や地震が起こり、また迫害の話をしておられることはつながりがあります。戦いや争いが世界規模になるのと同じように、キリスト者に対する迫害も近年になって世界各地で激しくなっているということです。世界福音同盟という、国際的なキリスト教の団体がありますが、そこが毎年 11 月

初めに、「迫害下にある教会のための国際祈祷日」というものを設けています。¹私たちの教会でも、数回、礼拝の中で祈りの時を持ちました。そこでは「一億人のクリスチャンが世界で迫害に直面している」こと、また「宗教的迫害の 80 森がクリスチャンに対するもの」という報告がなされています。それと同時に、近年ほど世界中に福音が信じられている時代ありません。これまでほとんどの人が信じないと言われている国々で急速に信仰者が増えているという報告もあります。そうした国々の中には、迫害の中で増えて行っているという報告もあるのです。

2C 大患難 15-22

このように世界規模で起こっていることを述べられた後に、イエス様は、エルサレムとユダヤ人に起こる出来事を語られます。初めに、神殿が破壊されることについてイエス様が語られましたね。そして弟子たちが、いつそのようなことが起こるのか、また世の終わりはどのようにになるのかについて尋ねました。

1D 荒らす忌まわしい者 15-22

15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。17 屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。18 畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。19 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。20 あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。

ユダヤ人たちにとって、預言者ダニエルの預言、そこで語られた「荒らす忌まわしい者」は、注目の的でした。ユダヤ人の歴史の中で、後にハヌカー（神殿奉献祭）と呼ばれるようになる、マカバイ家の戦いがありました。それは、ギリシアが支配していた時に、アンティオコス・エピファネスという王がユダヤ教を徹底的に迫害し、根こそぎギリシア化しようとした大迫害がありました。そこで、神殿にはギリシアの神であるゼウス像を立て、祭壇には、汚れた動物である豚を捧げさせました。これを荒らす忌まわしい者と呼ばれるようになりますが、主は、終わりの日に、これに類似する、いやそれ以上のことが起こるとダニエルを通して預言しておられたのです。

その中で、荒らす忌まわしい者が何をするかを書いている箇所があって、9章27節です。「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」一週というのは、一日を一年に数えていて、七年間のことです。この人物が、ユダヤ人たちと神殿やエルサレムについて、堅い契約を結びます。ところが半週、つまり三年半経った時に、いけにえや捧げ物をやめさせるということです。そして、彼はユダヤ人に対して、かつてアンティオコス・エピファネスが行ったように大迫害を行い、また世界に荒廃をもたらします。しかし、ここに書

¹ <https://jeanet.org/release/2017/10/1288>

いているように、その期間は三年半と定まっています、彼の上に破滅が降りると預言されています。

弟子たちが今、目にしている神殿は紀元 70 年に破壊されました。けれども、ダニエルが預言したことは起こっていません。世界に荒廃はもたらされていません。そして何よりも、イエス様は使徒ヨハネに対して、紀元 90 年代に啓示して、黙示録 11 章から 13 章にかけて、荒らす憎むべき者について、それを一頭の獣として登場させて神殿を荒らすことを伝えられていたのです。ですから、ここでイエス様が言われている「聖なる所」とは、今、弟子たちが見ているヘロデの造った神殿ではないのです。将来的に、ユダヤ人たちが世界に散らされた後、戻って来て、イスラエルを建て直し、それからユダヤ人がその周辺に住み着き、そして改めて神殿を建てるという中で起こる出来事、将来の出来事なのです。

そこで私たちは、二千年近く前に預言されたイエス様の言葉が、たった今の出来事に直結していることを知ります。紀元後 70 年に世界離散したユダヤ人が、再び戻って来たというのは近代になってからです。そしてイスラエルの国が建て直されたのは 1948 年。エルサレムがイスラエルのものとなったのは 1967 年。そして神殿の丘には、岩のドームというイスラム教の施設が立っています。しかし、そこに神殿を建て直そうとする動きが、ユダヤ教の中にあり、その計画は着々と進んでいます。もし世界情勢に大きな変化が起こって、イスラム教による大きな反発を抑えつつ、ユダヤ教の神殿を神殿の跡に建てることを許す、天才的指導者が現れたら、その人が荒らす忌むべき者、ということになります。そして黙示録 13 章、またテサロニケ第二 2 章を見ますと、この男は、神殿の聖所に入って、自らを神とします。そして速やかな攻撃をユダヤ人に対して行います。

ところでイエス様は、「ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」と言われました。これは不思議な指示です。なぜなら、ユダヤ地方そのものが山地だからです。山地に住んでいる人に、「山に逃げなさい」というのは、どういうことでしょうか？それが、旧約時代にはセイル地方というものがあって、エドム人がかつて住んでいたところ。オバデア書には、そこに対する預言があり、高い山々に囲まれているエドムの町について書かれています。また新約時代には、そこはナバテア王国が支配していました。ナバテア王国については、唯一、パウロがコリント第二 11 章で「アレタの代官(32 節)」として出て来るのみです。アレタス四世が、王国が最も盛んになった時の王でした。その首都はペトラと言います。旧約聖書では、エドム人の都「ボツラ」として出てきます。ボツラにイスラエルの残りの羊を集めることを、預言者ミカが言っています(2:12)。黙示録 12 章では、イスラエルを表す女が、荒野に逃げる姿があります。セイルの地方は、荒野であり、かつ険しい山地です。

そして、かつてマカバイの戦いの時、ギリシアの勢力が攻めてきた時に、人々が洞窟に隠れ逃げて行きましたが、人々は平らになっている屋上から、下に降りることなく、屋上から隣の家の屋上に渡っていったという記述も、ヨセフスによってあるそうです。荒らす忌まわしい者、すなわち反キリストが戦争をしにかけてくる時も、まるで津波か洪水が押し寄せてくるように素早く襲ってくるでしょう。そして畑にいる人も上着を取りに戻ってはならず、身重の女、また乳飲み子を持つ女は

逃げるのが遅くなるので悲惨です。そして、安息日であれば、歩く距離が決まっています。さらに冬は、イスラエルでは雨季です。泥のぬかるみによって逃げる速度が落ちるのです。

21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決していないような、大きな苦難があるからです。22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われられないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。

ここに、しばしば「大患難」と呼ばれる言葉が、イエス様の口から出ています。ユダヤ人に対しては、エレミヤが「ヤコブの苦難」と言った言葉があります。「30:7 わざわいだ。実にその日は大いなる日、比べようもない日。それはヤコブには苦難の時。だが、彼はそこから救われる。」おそらく、イエス様はこのエレミヤの預言を念頭に置いてお語りになられたのでしょう。ユダヤ人にとって大きな試練が来るけれども、そこから救われるとエレミヤが預言したように、その日を神が少なくしてくださいと言われます。ダニエル書には、定められた時があって、それが一時、二時、半時とあり、先ほど話したように、三年半の期間であることが明らかにされています。

2D. 偽預言者の惑わし 23-28

23 そのとき、だれかが『見よ、ここにキリストがいる』とか『そこにいる』とか言っても、信じてはいけません。24 偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います。25 いいですか。わたしはあなたがたに前もって話しました。

大患難の時には、偽預言者が大勢出て来ることを、ゼカリヤが既に預言していました(13:3)。そして、テサロニケ第二 2 章には、この不法の者が、「サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。(2:9-10)」とあります。そして黙示録には、反キリストである獣の他に、その獣を拝むように導くもう一頭の獣が現れ、それが偽預言者です。

今、まだ大患難の時代に入っていないませんが、それでも惑わしの力は働いていますね。偽キリストは、ここにいる、あそこにいる、という偽預言が数多くあります。最後の時には、特にメシアを待ち続けたユダヤ人にとって、この苦難の中で救いを切望しているのです。その時に惑わしが来ます。人は苦しい時に何でも信じてしまう弱さを持っていますが、偽預言者はそれを上手く利用するので、そして、彼らは申命記にある「もう一人の預言者」すなわち、モーセがかつて不思議と徴を行ったように、メシアも同じような偉大な力を見せると信じています。それで、不思議をやらされると、なおのこと信じようと思うわけです。けれども、イエス様は気をつけなさいと注意しておられます。

26 ですから、たとえだれかが『見よ、キリストは荒野にいる』と言っても、出て行ってはいけません。『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはいけません。27 人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくのと一緒のようにして実現するのです。

聖書には、主が全世界に現れて戻って来られる時は、だれの目でも明らかであることが書かれています。旧約聖書に数多く出てきますが、黙示録 1 章 7 節にヨハネが預言しているところを見ましょう、「見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかり、アーメン。」それをイエス様は、稲妻が東から西にひらめくのと同様に、とされています。

28 死体のあるところには、禿鷹が集まります。

突然、驚くような言葉ですね。これは、ハルマゲドンの最後の戦いを預言者たちが語った時に出て来る情景です。イエス様が反抗する世界の軍隊に対して戦われます(イザヤ 63:1-6)。そして、そこで死んだ軍隊の兵士どもが積み上がる、生々しい姿も預言されています。そしてヨハネは、黙示録 19 章でそれを「神の大宴会」と呼んで、積み上がった死体を猛禽類がついばみに来る様子を預言しています。私たちにとって、かなり強烈な、凄惨な光景ですが、聞いている当時の人たちにとっては、このような凄惨な光景は、自分たちの歴史の中では数多くありました。その戦いを終わらせるための最後の戦いは、彼らにとっては「苦しみを終わらせる」希望の言葉でもあるのです。テサロニケ第二 1 章にも、キリスト者に対してもイエス様が、迫害し、苦しみを与える者に対して苦しみをもって報いを与えるとあります。

3C 天変地異 29-31

29 そうした苦難の日々の後、ただちに太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされます。30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。

終わりの日の最後、主が到来する直前は、このような天変地異、大異変があります。旧約聖書には膨大に書かれており、黙示録においても、詳細にどのようになるのかが書かれています。そして先ほど、黙示録 1 章を引用したように、主ご自身が現れる時に、地の全ての部族が悲しみ、主が栄光と力をもってやって来ます。

31 人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。

主が選ばれた者たちとは、残された民、イスラエルのことです。主が全世界に対して裁きを行われた後に、苦しみを受けていたユダヤ人で主に立ち返った者たち、残りの者たちを、世界中から呼び戻されます。「御使いたち」が積極的に関わるということは、そこに神からの強い介入があって、彼らが戻ることのできる道筋を造るのでしょう。このことも、旧約の預言者たちは膨大に描いてい

て、例えばイザヤはこう預言しました。「11:11-12 その日、主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りの者を買取られる。彼らは、アッシリア、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シンアル、ハマテ、海の島々に残っている者たちである。主は国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。」

そして主は、ご自分の民を召集するために、しばしばラツパを用いられます。民数記にて、遠くに広がったイスラエルの宿営に対して、銀のラツパによって召集をすることが命じられている箇所があります。そして興味深いことは、キリスト者が天に引き上げられる携拳の時も、ラツパが吹き鳴らされるとあることです。

3B 到来の接近 32-35

これらが、主が戻って来られるに当たっての徴なのですが、私たちには驚くような光景かもしれません。けれども、たくさん旧約の預言者も言及していることとお話したように、聞いている弟子たちにとっては、それほど違和感のない、これまで聞いていたものだと確認できたと思います。そして次にイエス様は、これまでお語りになったことのまとめを語られます。

32 いちじくの木から教訓を学びなさい。枝が柔らかくなって葉が出て来ると、夏が近いことが分かります。33 同じように、これらのことをすべて見たら、あなたがたは人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。

イエス様が再び、分かり易い譬えで話しておられます。「いちじくの木」は、既に、葉は茂っているけれども実がないいちじくの木を、呪われて、それが枯れてしまいましたね。初めの実というのがあって、それから本格的に 6-7 月辺りに実が結ばれます。今は、まだ三月終わり、四月初めの春ですから、これから夏になります。それと同じように、これまでイエス様が語られたことを聞いていて、それで今、世界で起こっていることを見れば、確かに近い将来、実が結ばれるだろう、人の子が間もなく来られるのだろうというのが分かる、ということです。

34 まことに、あなたがたに言います。これらのことがすべて起こるまでは、この時代が過ぎ去ることは決してありません。35 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。

ここで、一つの結論を出しておられます。一つ、「この時代が過ぎ去ることは決してありません。」と言われていました。ここの「この時代」とは、「この世代」と訳すことができます。イエス様が関わっておられる世代です。もうとっくの昔に、イエス様と関わっておられた世代は終わっていますね。世代と言えば、四十年という期間がありますが、イエス様がこの言葉を語られた約四十年後、紀元 70 年に神殿が破壊され、ユダヤ人は世界に散って行きました。そうすればこの世代は過ぎ去ってしまったということになってしまいます。しかし先にお話したように、90 年代にヨハネが書いた黙

示録には、未だイスラエルに対する神のご計画が書かれていたのです。エルサレムに神殿がある姿が書かれていました。

そうです、イエス様はご自分が関わる世代、あるいは民族と言ってよいでしょう、それはこれらのことが起こるまでは決して過ぎ去ることはないということなのです。70 年を過ぎたらユダヤ民族は見捨てられたというのではなく、それとは正反対に、ユダヤ民族を、自分自身がイエス様の呼びかけによって集められて、この方を受け入れる時まで、見捨てられることはないということです。マタイ 23 章の最後に、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と言われる時まで、主はあきらめておられないということです。

そしてすごいのは、天地は過ぎ去るけれども、イエス様の言葉は過ぎ去らないということです。イエス様の言葉に、天変地異そのものが書かれていますから、当然と言えば当然です。私たちがもう一度、私たちの信じている方とその御言葉は、私たちが最も安定していると感じているもの、最も頼っているものよりも、さらに頼れる存在なのだということを知る必要があります。

2A 知らされない日時 36-51

そして 36 節から、話のがらっと変わります。これほどまでに、「これらのことを見たら」と言って、徴を見て行くことについて語られていました。ところが、次から「いつ来るか分からないから、いつでも用意しておくように」という勧めに変わります。

1B ノアの日(目を覚ます) 36-42

36 ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも知りません。ただ父だけが知っておられます。

ここの解釈を、「いろいろな徴があってそれは、いちじくの実がなるように見て行くことができるけれども、正確な日時については分からない」というようにする人々がいます。けれども、これから見て行けば分かりますが、何の兆しもない時に突如としてやってくる。思いがけない時にやってくるという意味で、いつかは誰も知らない、父だけがご存じであるということです。ですから、そういった意味ではないのです。

ここが大患難の後に主が地上に戻って来られるということ、その出来事しかないのだと受け取る、「患難後携挙」の考えを取る人々がいます。教会は患難時代を通り、その最後にイエス様が戻って来られる直前に携挙があり、そして空中からそのまま地上に共に戻ってくるというものです。その考えには、それなりの根拠がありますが、私その考えには同意できない理由があります。十分にいろいろな徴があるのにも関わらず、どうやって 36 節にある言葉を受け入れられるのか？ということなのです。「携挙」というものが、今すぐにでも来る可能性があるものであり、また前兆がないものであり、ゆえに、患難時代の前に、いつでも、今でも起こるものと考えるとすっきりします。他

にも患難時代の前に携挙があるという重要な根拠があるのですが、それはここではお話ししないで、主が、突如、今すぐにも来られるという重要な教えについて、これから見て行きます。

37 人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです。38 洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。39 洪水が来て、すべての人をさらってしまうまで、彼らには分かりませんでした。人の子の到来もそのように実現するのです。

主が来られる時の例として、ノアの日を挙げておられます。箱舟をノアが造っている時は、誰もが洪水が来ることを考えてもいませんでした。その兆しがなかったのです。そして、動物の雄雌がそれぞれ入っていき、そしてノアの家族八人が入っていき、その戸が閉められるまで、おそらくは雨も降っていませんでした。当時は、地下水が豊かに流れていて、天からの雨がなくても豊かにされていた可能性があります。上からの水がこの時に初めて落ち、そして地下水も開かれて、それで一気に洪水になった可能性があります。

ですから、それまでは「人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました」とあります。いつもの日常生活をしていました。世の楽しみがありました。地震が突然起こるように、いやそれ以上に、主が戻って来られるのはすぐなのだということです。

40 そのとき、男が二人畑にいると一人は取られ、一人は残されます。41 女が二人臼をひいていると一人は取られ、一人は残されます。

ここでは、一人一人が主の前に立たせられているという峻厳な事実があります。たとえ、いつもと同じ活動を日常生活で行っていたとしても、主のものとして裁きから救われ、主のものではない者は裁きの中に入っていくということです。また、こうやって労働しているその現場で破滅が襲って来ることですから、それだけ起こってからは遅すぎるぐらい、突如として来るのだということです。

ところで、ここで、裁かれるのは取られるほうなのか、あるいは残されるほうなのか？という議論があります。私は、取られるほうではないか？と思います。主によって取られて、天に引き上げられて、地上に神の怒りが下るけれども、それは取り残された者たちということではないか？ということです。意見が分かれますが、いずれにしても突如として到来されるのであり、それぞれが主に対して悔い改めているかどうかで、運命が真っ二つに分かれるということでもあります。

42 ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから。

これが、初めの戒めです、「目を覚ましていなさい」であります。午前礼拝でお話したように、「いつ来るのか分からない」という意味をまるで正反対に取っている人々がいますが、「たった今、来るかもしれない」という備えこそが、ここで主がいつ来るか分からないと言われている理由です。朝にでも、「イエス様、あなたは今日来られるかもしれません。」という言葉を祈りの中に入れてもいいかもしれませんね。遠くの話ではなく、身近な真理なのです。

2B 盗人(思いがけない時) 43-44

43 次のことは知っておきなさい。泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら、家の主人は目を覚ましているでしょうし、自分の家に穴を開けられることはないでしょう。44 ですから、あなたがたも用心しなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。

イエス様は、「いつ来るのか分からない」と言われた後に、さらに突っ込んで、「思いがけない時に来る」ことを強調されています。私たちの中には、予測しておこうとする欲求が強いです。それで、「徴や予兆がないから、まあ、問題がないでしょう。」という油断がでできます。これだけイエス様が、「いつかというのは、知らされていないのだ」と言われているのに、どこかで計算しているのです。ですから初めは熱心にイエス様を待っていたところが、だんだん「来ないから、本当に戻ってこないのだろう」と思い、それで心がイエス様からわずかに離れていくのです。

ですからイエス様は、むしろ「思いがけない時にこそ来る」と強調されています。そして、泥棒の譬えを話しておられます。イエス様がここでは泥棒と同列にご自身を置かれています。眠っている時こそ泥棒が来るのと同じように、人々が霊的に眠ってしまっている時にやって来るということです。ちなみに家が泥で出来ているので、壁に穴を開けて入ってくるのが容易にできました。

3B 忠実な僕(忠実さ) 45-51

そこで次から 25 章にかけて、主に仕えているいるということと、主の到来との関わりについて話しておられます。私たちが神に仕えています、そして教会でも具体的に奉仕をして、また生活圏で主を信じて、主に仕えています。そのことと、主が来られるということは密接な関わりがあるのだということです。それは、主が戻って来られる時に、その時に信仰の歩みの報いを受けるからです。

45 ですから、主人によってその家のしもべたちの上に任命され、食事時に彼らに食事を与える、忠実で賢いしもべとはいっただれでしょう。46 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。47 まことに、あなたがたに言います。主人はその人に自分の全財産を任せるようになります。

主人が家からしばらく離れているという設定は、すでにぶどう園の譬えの中で出てきましたね。主人は自分の所有の畑を農夫に任せて自分は遠くのところに住んでいるのですが、収穫時には使いを送ってその収穫を受け取りに来る、というものです。ここでは、家が任されています。大事な

のは、自分自身もしもべなのですが、それでも他の仲間のしもべもいて、彼らを養っていく務めを受けていることです。自分独りが信仰を守っていればよい、ではなく、自分に任された人々がいて、その人々が養われるように仕えていきます。

その時に大切なのは、「忠実さ」です。いつもと変わらずに食事を出すということ。それが忠実で賢いと言われていました。どうでしょうか、母親として子どもに、または妻として夫に、忠実に食事を出すことが最も大事ですね。自分の思いつきで精魂込めてすごい料理を用意しても、疲れたり、あきたらやめるといふのでは、元も子もありません。いつものご飯が食べられることが、賢いことです。パウロは、主のしもべとして、神の奥義の管理者として、こう言いました。「その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。(1コリント 4:2)」私たちはとにかく、自分が何かをしていることに価値を置きます。けれども、忠実さというのは、自分が動かされているもの、意識しなくても行っているもの、姿勢と言ってもいいでしょう。そしていつもしていることです。ある時に、何かを行ったらそれは助かりますが、いつも同じようにしているのか？そこには、しもべの姿勢が必要なのです。自分を捧げ切って、主人の言われることに従うのです。

48 しかし彼が悪いしもべで、『主人の帰りは遅くなる』と心の中で思い、49 仲間のしもべたちをたたき始め、酒飲みたちと食べたり飲んだりしているなら、50 そのしもべの主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来て、51 彼を厳しく罰し、偽善者たちと同じ報いを与えます。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。

しもべとして、自分の欲望を優先させてしまっている姿ですが、どうしてそうなったのか？といいますが、「主人の帰りは遅くなる」なのです。主が戻って来る兆しが見えない、だから遅くなるのだと勝手に思い込んでいるのです。それでこのような悪い行いに走りました。私たちが、信仰的に後退する時には、必ず思いの中でそのような油断があります。「主の帰りは遅くなる」と自分で思いこませているからです。主に対して仕えているのだ、ということ。自分の魂を救われ、この方のものになり、この偉大な主、偉大な王に恵みによって仕えているのだということ。そこに、喜びがあります。私たちが、日頃の生活の思い煩いに巻き込まれて、自分のしていることが主のためにしていること、主に対してしていることを忘れてしまう、そういう時に仲間に対する悪い行いとなって出てきます。ですから、これほど主が来られることは大切です。その時にこそ報いを受けるからです。この方から報いを受けるのだと分かれば、他の価値観を退けることができます。